

JISS

2013



[特集]
座談会：ロンドン2012におけるサポートの効果

[特集]
マルチサポート事業が果たした役割

ロンドンオリンピックの日本選手団戦績を振り返る

金メダル獲得5位以上ならず反省も
入賞種目数最多で将来に明るい兆し

2011年8月のスポーツ基本法、2012年3月のスポーツ基本計画を受けた最初のオリンピックである、第30回オリンピック競技大会（ロンドン）において、日本代表選手団は金7つを含む38個のメダルを獲得した。38個のメダル獲得は過去最多であり、また大会初日から途切れなくメダル獲得が続いたことも相まって、日本国内は日本選手の活躍に大いに湧いた。

しかし、スポーツ基本計画には政策目標として「オリンピック競技大会の金メダル獲得ランキングについては、夏季大会では5位以上」とある。今大会における金メダル獲得ランキングは11位と、5位を大きく下回ってしまったことは大いに反省すべき点である。

金メダルランキング上位国は金メダル獲得が大いに期待される競技を多く抱えている。2000年に開催されたシドニーオリンピック以降4大会連続で金メダルを獲得している競技は、日本では柔道だけである。一方、今大会で金メダル獲得ランキング1位となった米国は6競技、2位の中国は7競技、3位の英国は4競技、4位のロシアは5競技において、4大会連続金メダルを獲得している。我が国の「柔道頼み」の構造は明らかである。この改善が金メダル獲得ランキング5位以内を目指す上で必要となる。また、4大会連続でメダルを獲得した

競技においても、米国12、中国12、英国7、ロシア11に対して日本は4と、メダル獲得基盤についても脆弱であることが示唆される。メダル獲得有望競技が増えなければ、金メダル獲得有望競技も増えないことはいうまでもない。

とはいえ、今大会の成績は今後に向けて明るい兆しが見えたともいえる。

今大会におけるメダル獲得競技は13競技と過去最多であった。卓球、バドミントンでの初のメダル獲得に加え、メキシコ以来のサッカー、ボクシング、ロサンゼルス以来のウエイトリフティング、バレーボールなど「何十年ぶり」、という競技も数多く見られた。メダル獲得競技13はロンドンオリンピック参加国中6番目の数字であり、金メダル獲得ランキング5位を目指す国として、その順位に相当するメダルの数、メダル獲得競技の数であったといえる。

8位以内に入賞した種目数が過去最多であったことも心強い。今後、今回メダル獲得に成功した競技が連続してメダルを獲得すること、またメダルにあと一步であった競技がメダル獲得競技の仲間入りをするのが期待される。そして、この中から連続して金メダルを獲得し、お家芸と呼ばれる競技が増えることが政策目標達成の鍵となる。

（東京Jプロジェクト2012（ロンドン）報告書より）

	2000年シドニー大会	2004年アテネ大会	2008年北京大会	2012年ロンドン大会
金メダル獲得競技	2競技 陸上競技 柔道	5競技 陸上競技 水泳 体操 レスリング 柔道	4競技 水泳 レスリング 柔道 ソフトボール	4競技 体操 レスリング 柔道 ボクシング
メダル獲得競技	4競技 水泳 レスリング テコンドー ソフトボール	5競技 セーリング 自転車 ソフトボール 野球	4競技 陸上競技 体操 自転車 フェンシング	9競技 陸上競技 水泳 サッカー バレーボール ウエイトリフティング 卓球 フェンシング バドミントン アーチェリー

